授業中に居眠りしたら、違う世界で知らない姫を取り戻すことになりました。

偽帝

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

授業がつまらなくて居眠りした高校一年生加賀誠。しかし目が覚めると、知らない空間で知らない少女千斗いすずに出会い、握手を迫られる。握手して空間を抜け出すと、そこは今まで住んでいた世界とは違う世界で・・・!?

主人公と、いすずとアクワーリオ（エレメンタリオ）で冒険しながらラティファを助けに行きます。　モッフルたちはまだ登場未定・・・。

目次

一日目 …… 1
二日目 …… 17

一日目

カッカッカッ・・・・・。

教室にはチョークの音が静かに響いている。

「・・・・・」

窓側の席でぼんやりと黒板を眺めていた、加賀誠(かがまこと)は視線を外に向けた。

外はピュウと音を立てながら、庭に植えられた木が揺れていた。

「寒そ・・・」

誠は持っていたシャーペンを机に置くと、体を前に倒して居眠りの体勢を作った。

（どうせ今日も授業は進まないだろ・・・）

顔を下にすると、誠はゆっくりと目を閉じた。

「・・・すけて・・・・・」

少女の言葉が頭に響く。

「・・・たす・・・・けて・・・」

「はっ！」

頭の中に響いた謎の声で誠は目を覚ました。

しかし目を開けたそこは教室ではなかった。

紫色をした淀んだ蜃気楼みたいなのが空間全体に広がっている。

「ここは・・・!?」

状況がわからないまま誠は立ち上がると、机と椅子が風のようにフワッと消えた。

「!?」

「ここは現実とのハザマ・・・みたいな場所よ」

突然女の子の声がして、誠は振り返った。

誰もいないはずのこの空間に、一人の少女がいた。

腰くらいまである亜麻色の髪をポニーテールにしていて、大きいな瞳が特徴的な子だ。

「私は千斗いすず。貴方が加賀誠君ね？」

「あ、ああ・・・」

咄嗟で何がなんだかわからないが、取りあえず頷く。

（なんで俺の名前を・・・）

誠がそう思っていると、いすずが言った。

「良かった。早速だけど私の手を握ってもらえる？」

無表情でいすずはそう言うと、さっと手を差し出してきた。

「え・・・？」

何かわからないが取りあえず誠は手を伸ばすが、途中で止める。

「・・・・・」

それを見たいすずは片方の手で誠の腕を掴むと、無理矢理自分の手を握らせようとする。

「ちょっ、やめろって・・・！」

力を入れていすずの引っ張る手を離すと、誠は言おうと口を開いた、が・・・。

口を動かすことが出来ない。

殺気を感じた誠は視線をゆっくりと下に向けた。

すると、いすずがどこから出したのかマスケット銃を誠の口の中に突きつけていた。

「ふぇ・・・？」

また状況が良くわからないが、誠は取りあえず両手を上げる。

「素直に手を握らないと・・・、この引き金を引くことになるけど・・・」

いすずは人差し指でトントン、と引き金を触った。

流石にヤバいと感じた誠はそっと手を伸ばしていすずの手を握った。

手を握るとお互いの手の中が光り、やがてこの空間を眩しく覆っていく。

「ッ!?」

誠は眩しさに目を瞑った。

暫くたって眩しくなくなったことを確認すると、誠は目を開けた。

「ここは・・・?」

視界に広がるそこは先ほどの空間とは違う、どこかの公園のような場所だった。

周りに人は歩いていないが、何となく住んでいた場所とは違う感じがした。

誠は足の力が抜けてその場に座りこむと、いすずが見下しながら言った。

「ここはトッカルという町よ。まあ、私にはそれしかわからないけど・・・」

そう言って伸ばしてきた手に掴まり誠は立ち上がる。

「トッカル・・・?」

「ええ。ここは加賀君の住んでいた世界とは別の世界・・・、アークワールドのトッカルという町よ」

「アークワールド?」

「そう。この世界のどこかに私、いや私達の姫が閉じ込められているの・・・」

「姫・・・?」

「加賀君、あの空間に来る前に女の子の声が聞こえなかった?」

誠は顔を少し上げて思い出す。

「確かに、『助けて』みたいな声が聞こえたような・・・」

「それよ。それが私達の姫、ラティファ様の声よ。声が聞こえた加賀君は、選ばれたの」

「選ばれた?」

誠は首を傾げる。

「そう。私達と一緒に、ラティファ様を取り戻す一人として」

「な、何で俺が知らない人を・・・」

そう言うと今度は腹部に銃口をあてられた。

「すいません・・・」

苦笑いで誠がそう言うと、いすずは銃を離し、ポケットから四枚のカードを取り出した。

四枚のカードはそれぞれ違う模様と色だった。

「これは?」

「これからラティファ様を取り返すまで戦闘があるわ。でも、加賀君は武器持ってないから、この精霊達を使って」

「戦闘・・・・。って、精霊？」

ますます現実から離れていくが誠は話を聞く。

「ええ。カードの中にはそれぞれ精霊が入っているの。そのカードの模様が精霊が何を司っているかを表しているわ」

「へえ・・・」

誠は一枚一枚カードを眺めた後、四枚を持って手を伸ばした。

「なあ、どうやったら召還？できるんだ？」

「そのまま、『出でよ、エレメンタリオ』と言えば出てくるわ」

（案外簡単なんだな・・・）

誠は手を伸ばしたまま、カードに向かって言った。

「出でよ、エレメンタリオ！」

すると青、赤、緑、白、四枚のカードそれぞれが光りだした。

カードから出るように光が四つ、公園の草原の上に現れる。

そしてそれぞれが人の形になると、光が消えた。

現れたのは女の子の精霊四人で、それぞれ服装と髪が違った。

その中の一人、青のカードから出てきた精霊が礼をしてから誠に言った。

「あ、あの私達エレメンタリオです、よろしくお願いします！」

誠に向かってそう言うと青の精霊は残りの三人を紹介した。

「この子はサーラマ。火を司っています」

「よろしくー」

紹介されたサーラマという赤い服装の精霊は携帯をいじりながら口だけの軽い挨拶をした。

（妖精なのに携帯・・・）

誠はそう思ったが言わずに説明を聞いた。

「こちらはコボリー。土を司っています」

「よろしくおねがいします」

コボリーはあまり表情に感情を出さないで素っ気無く言った。

「隣の子はシルフィー。風を司っています」

「くるくるくるー♪回る回るー♪」

シルフィーという精霊は笑顔でくるくると回っている。

「すいません、空気読めない子で・・・」

青の精霊が申し訳なく言った。

その後、自分の胸に手を置いて誠を見た。

「私はミュース、です。水を司っています」

「紹介ありがとう。よろしく、ミュース・・・ちゃん？」

「はい、よろしくお願いします！加賀さん！」

ミュースは笑顔で誠の握手に答えてくれた。

（やっぱり俺の名前を知ってるのか・・・）

握手し終えると、いすずが後ろから言った。

「紹介は終わった？」

「え？あ、まあ・・・」

「そう・・・」

いすずはスタスタと歩いて誠とエレメンタリオの間に立つと、ジッと誠の目を見た。

「早速だけど、加賀君にはやってもらわなければいけないことがあるわ」

「何だ？」

「このエレメンタリオの魔力を開放してほしいの」

「え!?そんなの、俺にどうやれって・・・」

誠が言うと、いすずはエレメンタリオに向かって指を差した。

その瞬間、四人それぞれ頬が少し赤くなる。

いすずは、淡々と言った。

「エレメンタリオの四人に、キスするのよ」

二日目

「キスって・・・」

誠はそれしか言えなかった。

口をゆっくりと閉じると、視線をエレメンタリオに移す。

四人ともオロオロした感じで、頬を赤らめていた。

「じゃあ・・・」

いすずはカードを握っていた誠の手を軽く振る。

すると、エレメンタリオが再びカードに戻される。

「え、何で戻して？」

「お互いに面識がないと困るでしょ？まあ、今はそれより・・・・」

いすずはマスケット銃を誠の額に当てた。

何か慣れてきた誠はため息をつく。

「宿を探しましょう」

「疲れた・・・」

ベッドに体を投げて、誠は力を抜く。

三時間くらいかけてようやく、ここに泊まることが出来た。

ベッドの感触を楽しみながら、誠はいすずを見た。

隣のベッドではパジャマ姿のいすずが無言で靴下を脱いでいた。

「・・・どうしたの？」

誠の視線に気づいたいすずはそれだけ言うと、着ていた服を畳んでベッドの中に入った。

「電気、消しといてね」

「はい・・・」

着替え終わっていた誠は近くのランプの光を消した。

「なんで俺が・・・お前達の姫様を・・・」

「選ばれたものは仕方ないから、黙って付き合いなさい」

「ああ。今さら断れないしな」

「加賀君」

「今度は何だ?」

「後悔してる?自分が選ばれたことに」

「いや・・・」

誠は手を目の上まで持ってきて、隠した。

「色んなことが起こりすぎて、疲れた」

「そう・・・」

いすずはそう言うと、瞼を閉じた。

「おやすみ、加賀君」

（もう考えるのは止めよう、キリが無い・・・）

いすずの言葉の後、誠も眠りについた。

「ん・・・」

窓から差し込む朝日の光で、誠は目を開けた。

「早く起きなさい、加賀君」

いすずの声を聞いて体を起こそうとしたが、頬に冷たいものの感覚があった。

起きるのを止めてそれが何かを見ると、案の定マスケット銃だった。

「起きるからさ、銃を離してくれないｋ・・・」

バァン
!!!!

「・・・・・」

目を見開いたまま、誠はフリーズする。

周りではベッドの羽毛が空中を舞っている。

（ついに撃ちやがった・・・）

口を小さく開いて息を吐くと、誠は起き上がって堂々と立っているいすずに言った。

「何で撃つんだよ、俺寝てただけだろ!?」

「ごめんなさい、最近撃ってなかったから・・・」

（どんな理由だよ・・・。人を殺しはしないと思うが今後またこういうことがありそうだな・・・）

「それじゃ、一度出るわよ」

いすずに言われるがままに、一度部屋を出る。

「私は必要な物を買ってくるから、その間にキスの件を片付けちゃいなさい」

「買ってくるって、お前お金あるのか？」

誠が指摘するといすずはどこから取り出したのか小さな袋を誠に見せた。

「あの空間に来る前にお金は換金してるから大丈夫よ。それに、いざとなったらこれで・・・」

そう言っていすずは再びマスケット銃を構えた。

「武力解決は止めといたほうが・・・」

「わかってる。最終手段だから」

いすずは一回誠を見た後、トルッカの商店街の方へ歩いて行った。

「どうするか・・・」

昨日と同じ公園の噴水の前のベンチに座る。

日差しに反射して、噴水の水が七色に見える。

誠はもらった四枚のカードを取り出した。

（一番仲良く出来そうなのは・・・）

四枚のカードの一つ、青のカードを選んで持った。